

## 初めて絵を所有する

一九八九年七月から九三年五月までの約四年、モスクワに駐在した。その時期は、折しも当時のゴルバチョフ大統領が民主化と市場経済への移行を目指してペレストロイカ運動を推し進めたが、試行錯誤の混乱の中で経済は落ち込み続け、遂にはソ連が崩壊するという歴史上の激動期であった。

ところで、ゴルバチョフ氏はその公明正大さと先見性をもって時代を動かした点や、時代に先んじていたがゆえの悲劇性において、私の愛して止まない十九世紀ロシアの文豪たちと一脈通じるものがある。ソ連が従来のままでは西側先進諸国からますます後れをとることや経済を疲弊させている軍拡競争の無意味なことをいち早く悟り、新思考外交で世界を米ソ二極対立の冷戦構造から平和共存へと導いた功績は計り知れない。しかし、国内においては根強い官僚主義と特権階級に阻まれ、成果を出せないまま、経済再建の志を半ばにして退陣のやむなきに至ったことは周知の通りである。保革両陣営から攻撃され、ロシア国民の彼への信頼は地に落ちたままであるが、歴史は決して彼を見捨てないであろう。いつのことになるか、定かでないが、いずれロシアにおいても彼の先見性がしかるべく理解され、彼がなした事業が正当に評価される時期が必ずやってくると確信している。

その激動期にモスクワで生活し、制度や法律、価値観等あらゆるものが短期間のうちに根底から覆(くつがえ)り、日々の生活の中で人々がその直接的影響をまともに受けるのをそばで垣間見るといふ得難い体験をした。規則がいろいろ変わり、束縛から解放された人々は自由を実感し、社会の変化に熱い期待を寄せながら議論し合ったが、一方では、時の経過と共に物価は高騰し、物不足が深刻化していった。上から与えられた急激な変化に対し、大部分の人々は当然のことながら、従来の生活パターンや考え方、価値観をそう機敏には変えることが出来ず、時代の大きな流れに受け身に対応することとなった。どう生活を維持防衛していくかが人々の日々の大きな課題となり、仕事そっちのけで生活物資の獲得のために長い行列に加わったり、また、少し時間的に後のことになるが、路上に立って道行く人に物を売るようなことも、日常茶飯事化していった。

画家を職業とする人にとっても、それは例外ではなかった。むしろ、自己の芸術性、表現の深みを追求することに神経が集中されているだけに、生活の辛苦を嘗めたに相違ない。ただ彼らにとってそれは一般の人より遅くやってきたと想像出来る。販売ルートのひとつである画廊で絵が売れているうちは問題はなかった。一番先に時代の変化の影響を受けた画家は恐らく一流に属する画家であったであろう。一流の画家は国が定期的に絵の制作を注文し、生活の面倒を見る代りに、一般の画廊で作品を売ることは禁じられていたが(また、一九八〇年代の前半頃までは、同じく文化財保護の観点から百名ほどの特定画家の作品が原則国外持ち出し禁止になっていたようである)、絵を買い上げる国のシステムに乱れが出てくると、生活のために一部の一流画家の作品も少しずつ一般の画廊に出回るようになった。そうしたことが当局に知れて、一時的に閉鎖になった画廊もあったと聞いている。

私がモスクワに駐在していた期間は、折しも画廊に絵が最も豊富に出回っていた時期ではなかったかと思われる。駐在の後半になって、絵画の国外持ち出しについての国の規則

が変わったために、外国人の旅行者や出張者がよく訪れていた画廊でも絵が売れなくなるのであるが、そのことについてはまた後の章で触れることにしたい。

そういう時期に日本人一人事務所の初代の所長としてモスクワに単身赴任し、初めの一年は長期滞在者用のホテルに事務所と住居を構えた。住居は事務所とは別棟の二DKであったが、居間として使用した十畳ほどの部屋は南に面していて、日当たりが良かった。駐在の仕事にも慣れ、モスクワでの生活の緊張からある程度解放された翌九〇年四月のある晴れた休日のこと、居間にぼんやりくつろいでいて、ふと部屋の殺風景なことが気になった。ソファの対面はステレオ装置を置いてあるほかは何も遮るものがない白壁で、隅っこの方にカレンダーがひとつかかっているきりである。あるメーカーに勤め、モスクワ駐在の経験もある知人が、その駐在期間中に好きなリトグラフを何十点か集めたと話していたことを思い出して、絵でも飾ったら少しは生活に潤いが出るかもしれないと思いついた。

それに私は部屋に花を飾るのは好きではない。花瓶に挿された花は、安心して見ていられるのは最初の日ぐらいのもので、その後は毎日少しずつ精気の薄れていく様子を見るのは何となく気がかりの種であり、その分花を見る楽しみもそがれてしまう。それで、部屋に花を置くことは端から考えず、何となく絵をかけてみようという気になったのである。

それから暫くして、初めてロシアの画廊を訪れた。ロシア語の呼び名を直訳すると美術サロンとなるが、その呼び名の方が高級に響く。店の見てくれは私たち日本人の目からすれば、高級感のある画廊には見えないが、それは仕方がないとしても、売っている絵の方はそれなりの芸術品で、ロシア語の呼び名の高級な響きに相応しい。

私が最初に行った画廊は、レーニン通りが内環状線の上を跨いでクレムリン方向へ二十メートルほど進んだ左側の道沿いにある。オクチャーブリ広場の斜向かいに当たるので、モスクワに駐在している日本人の間では通称オクチャーブリの画廊と呼ばれていて、観光客等もよく訪れる所である。長い立方体の形をした大きな画廊で、中央に入口があって、展示場は左右に分かれている。壁という壁のところせましと絵が掛けてあり、また床にも立てかけられるだけ立てかけてある。全部で三百点強はあっただろう。ほとんどが油絵で、水彩やリトグラフもわずかながら置かれていた。また、中では絵ばかりでなく、画材や民芸品等の土産物、美的センスを感じさせる図柄の染め物(布のスクリーンで木枠に収められている)や絨毯(じゅうたん)等も売られていた。通りに面した広い窓は白い透かしのカーテンで遮られていて、照明も昼間はつけないので、中は少しばかり薄暗い。色々見た目挙げ句、三十号ほどの油絵を一点選んで、持ち帰った。

居間の白壁の中央にかけて、毎日顔を突き合わせるようになったその絵は、A・V・オフチャーロフ(一九二六~九四、ロシア芸術家同盟会員)という画家の描いた「霧の朝」(制作1989年 油彩・ボード 70 x 90 cm)という作品(本書の表紙に掲載)で、乳白色の霧がまだ晴れやらぬ夏の早朝に、少年が沼の岸边に一人座って釣り糸を垂れているといった風景が描かれている。少年のそばには少し朽ちかけた木の水汲み場が沼に突き出していて、その先は水面がずうっと画面いっぱい広がって、沼の対岸の木々は遠く近く、霧に煙って霞んでいる。

絵は写真と違って、いつまでもじっと見ていられるから不思議である。絵の細部に分け入って見ていると、いろいろ空想に誘われて、何だか自分もその絵の中を散策しているよ

うな気がしてくる。食後などにソファに座って、暫しそんなふうに絵を見ていて最初に気付いたことは、絵の具の色合いが光に微妙に反応して、見る時間により、絵がわずかながら違って見えるということであった。部屋の光量の違いによって、朝昼晩と見る度に、絵から受ける印象が微妙に変わるのである。見ているうちに何かと新しい発見があり、そのためにまた何かしら発見が期待出来るような気がして、自然と見る距離や角度をいろいろ試しながら絵と対峙するようになった。

絵にはそれぞれ、絵が一番良く見える視点が必ずあるもので、一般には、ある程度距離をとって見た方が絵は映える。「靄の朝」は、寝室の入口から斜めの角度で六メートルほどの距離をとって見るのが一番良い結果が得られた。要するに、住居の中では絵との距離が一番取れる位置がその場所で、それ以上距離を取ろうとすると寝室の奥に入ることになり、絵が見えなくなってしまうのである。

ある日、その位置から斜めに絵を見た時、沼の水面に力を感じ、画面が左右及び奥の対岸の方向にずっと広がる印象を受けたが、その途端、何十年も前の学生の頃に、何人かの友達と、どこだったか、湖にピクニックに行った時の思い出が突然甦った。みんなで湖に向かって道を歩いていると、遠くから思いがけず、人家の庭から家と木々の茂みに切り取られた一部の水面が覗いた。反射的にやっと湖に辿り着いたと直感し、やれやれと思ったのであるが、水面には切り取られた陰にずうっと広がりがあることを感じさせる力が漲っていた。その絵からも同じような力を沼の水面に感じ取ったわけである。絵にそんな面白い世界があるのを最初に手に入れた絵を通じて知ったのであるが、それでその絵により一層注目することになり、絵の理解もまた、自ずと深まったと言える。

絵を鑑賞するようになって以来、自然の景色にも注意を払うようになったが、黄昏時、散歩しながら木立を観察すると、靄に包まれた絵の木々の佇まいがそれらの木立の見え方に生き写しであることが解る。画家という者は良く観察しているものだと、つくづく感心したり、またある時は、前景の草の疎らに生え、なだらかに右下がりになっている地面が見た目以上に距離があって、凹凸に富み、どっしりした実在感が表現されていることに気付いて、驚きを覚えたりした。

絵の細部の中で一番目がいったのは釣りをしている少年であった。はじめは草むらに腰かけた少年のデッサンの確かさに感心したりしていただけであったが、見ているうちに、少年が朝靄の中で白い帽子を被っているのはなぜだろうか、帽子は余計なのではないか、あるいはほかに意味があるのだろうかとか、釣りをしながら何を考えているのだろうかといったことが気になり始めた。釣りをしながら俯き加減に座っている姿勢は悩みを持った人の姿勢でもある。その姿勢は、十九世紀後半のロシアの優れた画家の一人であるI・N・クラムスコイの有名な作品、「荒野のキリスト」（一八七一）を連想させる。キリストは荒野のごろごろした岩のひとつに腰かけ、孤独の中で沈思している。民衆への深い愛ゆえに良心と葛藤するその悩める表情は、また、画家と同時代のロシア知識人の苦悩をも表現していると言われている。少年の方は沼に向かって俯いていて、顔の表情は見えないが、八九年に描かれたその絵の中で、「靄の朝」の作者はロシア社会の混乱とその行く末の懸念を釣りをしている少年の心に託したのかもしれない。

少年を見ながら、その姿勢に絵とは全く関係のない私自身の心の悩みをも重ね合わせて、自分自身のことをぼんやり考えることもあった。また別の時は、少年の被っている白い帽

子はそういう悩みを否定する象徴としての意味があるようにも思えた。霏がかつた沼でひとりぽつんと釣りをする少年の姿に誰しも一抹の寂しさを覚え、そのため悩んでいるように見えるのであるが、一方絵を見る側のその時の気分によっては、白い帽子は単にその寂しさを和らげるため、バランス上描き加えられただけなのかもしれないという気もしてくる。そんなふうと同じ絵を毎日見ている少しも飽きがこない。まるで絵に描かれた実際の景色を額縁のある窓から眺めているような、そんな具合であった。

モスクワの孤独と向き合った気晴らしの余地の少ない私生活に、少しでも慰みが見出せればということで、何となく買い求めた絵であったが、予想外の面白さを見出して、それなら、絵の左右の白壁の空いたスペースにも一本ずつ釘を打って貰い、気に入った絵をかけてみようかという欲も湧いてくる。そんな次第で、ほとんど偶然と言ってよいようなきっかけから、絵を鑑賞したり、時には買い求めたりすることが私の数少ない趣味のひとつに加わることになった。